

むしろ、ご見解をお聞かせ願えれば、大変ありがたい。私は今の段階ではその構図について、それ以上は考えておりません。バックに恐らく風景写真とか鳥写真があつて、彼女たちの肖像写真を配置している構図自体もこのCが最初です。『文芸倶楽部』にそれまではバックに、その他の風景写真を持ってきて上に重ねるといふことは、他の全国美人図においては行っていなかったようです。よろしければ、その他の読み解き方を教えていただければ。

答：山口

専門ではないのでいい加減なことをいうと思いますが、1つは鳥というのは籠の鳥が野に放たれたというようなイメージがあるのかなあと、それから、鳥というのは近世においては取ってはいけない、鷹場がかなり設定されております特に江戸近郊では。農耕で田畑を荒らすものとして、鳥がイメージされていたところに外国人が入ってきて鳥撃ちをする、捕獲する、そういった視線があつたかもしれない。これが私が考えたことなんです。

答：菅

はい、ありがとうございます。是非参考にさせていただきたいと思います。

意見：中島佐和子（お茶の水女子大学・院）

人間文化の中島と申します。花鳥ということで花に喩えたのではないかと、美人女性を花と喩えて鳥と配置したのではないかと。

## 司会者のまとめ

平野 由紀子

3人の発表者の専攻は、それぞれ日本古典文学、日本近世史、日本近代文学であつて、対象も方法も異なる。

胡潔氏は平安時代の婚姻の実態を、古代中国の婚姻と比較することにより、その特徴を明らかにした。とくに多妻婚における女性たちの関係について、従来の研究の誤謬をただすことになったドクター論文「平安貴族の婚姻と源氏物語」の一部を発表した。女性たちが夫の生家で同居し、上下の厳しい身分差のもとに序列化されるのは、古代中国や日本の後代の婚姻においてであり、それとは明らかに平安時代の婚姻は異なっていた。

古代中国から古代日本に導入された娶嫁婚的な婚姻表現一〈聘〉〈妻〉〈妾〉〈前妻〉〈後妻〉などの言葉の意味の変容を実証的に示し、古代日本には中国風の妻妾制度は存在しなかったことを論証する。これは当時の平安貴族の婚姻住居規制と密接な関係があり、古代中国に見られる〈夫方住居婚〉はないと

指摘した。従来の研究に欠落していた多妻ら女性たち間の関係に注目することにより、「一夫多妻婚」と「一夫一妻多妾婚」との差を明確にした。前者である平安貴族の婚姻において、女性達は夫の生家に入って、序列化されることはなかった。多妻達は夫の生家に統制されず、妻たちはそれぞれの邸で生計を持ち、互いに優劣があっても古代中国の〈妾〉が〈妻〉に仕えるような上下の関係になく、それぞれ個別的に夫との夫婦関係を構成している。ここに平安貴族の婚姻における女性の地位の、日本の後代や古代中国にない特質があるとする。

吉田ゆり子氏は日本近世における女性、中でも、武家の家庭において女性がどのような地位にあったか、またどのような役割を担っていたかについて、頼山陽の母の日記を取り上げ考察した。子供の教育および、使用人をも含めた家族の季節ごとの衣服、寝具の調達が、その主たる役割であったことを、家族の成員や日記の記述を示しながら精緻な考察により明らかにした。

菅聡子氏は、明治時代の女性、特に樋口一葉という当代随一の女性作家を通して、職業作家であることと女性であることがどのように当時の人々に見られていたかを当時の文芸雑誌類の写真を手がかりに、女性作家たちは実は芸者たちと同じまなざしをそそがれていたことを指摘した。説得力のある興味深い論であった。

本大学院は学際性を教育研究の特徴としている。学際性とは何かという点について、現在、広く浅く総花的に知ることではないこと、なぜならそれぞれの学問分野には研究史の積み重ねがあり、その基礎のない議論は有効ではないこと、むしろ学問の諸領域の隣接する領域の方法と成果に注目することこそ有意義であるとの見解で文系も理系も一致している。

今回の分科会ではそのような観点から3人の発表者に依頼し、何よりも発表者自身が相互に刺激を受けたのではないかと。互いに対象と方法を異にする3人の発表者へのフロアからの質疑応答も活発であった。